【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	静岡県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	湖西市立岡崎小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	4	4	4	4	2	２５	３８
児童数	146	111	135	145	122	134	7	800	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「自ら求め、学び合う授業」の創造
－算数科における個に応じた指導の工夫を通して－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

全学年・算数
　児童の理解の状況に差が出やすく、習熟度に応じた指導が実施できると考えたため

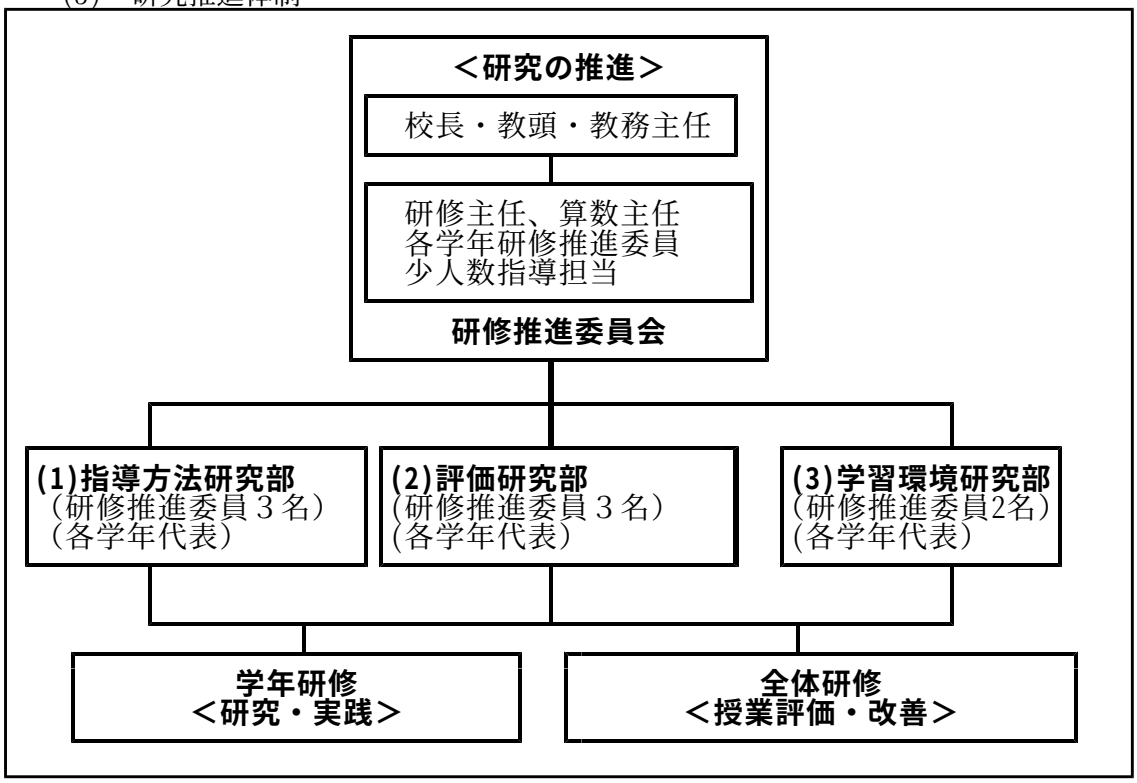
(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ：「自ら求め、学び合う授業」の創造 ○　研究の見通し (1)個に応じた指導のための指導方法や指導体制の工夫改善を行えば、きめ細かな指導ができ、基礎的・基本的な学習内容の定着や自ら学び、自ら考える児童を育成することができるであろう。 (2)児童の学力の評価を生かした指導の改善を行えば､児童に分かる楽しさ、学ぶ楽しさを体験させることができ、学習意欲を高め、進んで学び合う児童を育てることができるであろう。 (3)朝学習や保護者への広報活動など、子どもを取り巻く学習環境を充実していくことにより、自ら学ぶ習慣を身に付けた児童を育てることができるであろう。 ○　研究の内容・方法 (1)単元構想の工夫 ・学び方の基礎,基本の徹底　・指導体制の工夫 (2)子どもに返る評価の工夫 ・個人記録の作成と分析　・各種テストの作成 (3)学習環境の充実 ・基礎・基本的な学習内容の定着　・取り組みの普及公開

平成16年度	○　テーマ：「自ら求め、学び合う授業」の創造 ○　研究の見通し (1)個に応じた指導のための指導方法や指導体制の工夫改善を行えば、きめ細かな指導　ができ、基礎的・基本的な学習内容の定着や自ら学び、自ら考える児童を育成することができるであろう。 (2)児童の学力の評価を生かした指導の改善を行えば､児童に分かる楽しさ、学ぶ楽しさを体験させることができ、学習意欲を高め、進んで学び合う児童を育てることができるであろう。 (3)朝学習や保護者への広報活動など、子どもを取り巻く学習環境を充実していくことにより、自ら学ぶ習慣を身に付けた児童を育てることができるであろう。

	○　研究の内容・方法 (1)単元構想の工夫 ・学び方の基礎,基本の徹底　・指導体制の工夫　・指導方法の工夫 ・交流の場の設定 (2)子どもに返る評価の工夫 ・個人記録の作成と分析　・各種テストの作成　・評価規準の修正 (3)学習環境の充実 ・基礎・基本的な学習内容の定着　・取り組みの普及公開 ・校内学習環境の充実

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

(1)多様な形態による少人数指導の実践

多様な形態で少人数指導を積極的に試みることにより、その長所を多少なりとも明らかにすることができた。

等質2C3T	番号順等で２クラスを３つの集団に分け、単純に人数を減らし、一人一人に対応していく試み。レディネスに極端な差がない場合や、単元の初めの基礎的基本的な内容を学習する際に有効であった。児童の人数が少なくなる分、担当教師の一人一人の児童への対応が多少しやすくなった。また、いろいろなタイプの児童がいて、しかも、人数が少ないので、つきつめの段階での話し合いが充実した。
習熟度別 2C3T	習熟の差に応じて３つのコースを用意し、個に応じた指導を充実していこうという試み。単元の前半で単元の中心となる考えを学習した後、児童が習熟の度合いを振り返りテストで把握し、ガイダンス後、児童自身がコースを選択して補充・深化・発展学習を行う。しかし、単元に入る前に行うレディネステストで極端に差が見られる場合は、単元の前半から習熟度別で行った。学習内容を十分理解できていなかった子にとって、10人程度で行う授業は理解を深めるのに有効だった。

課題別 2C3T	課題別にコースを用意し、児童の興味関心を大切にしていこうという試み。主に図形領域で実施した。興味関心により自己選択して学習に取り組むため、児童の意欲は高まった。また、同じ課題で取り組むため児童同士の教え合いや話し合いが活発に行えた。
習熟度別 1C2T （ＴＴ）	練習問題などを行う際、学習の速度や習熟の度合いに応じて、２つのグループに分かれて個に応じた指導の充実を図ろうという試み。１時間通して行ったり、１時間中のある部分で行ったりした。学習の速度が極端にちがう場合など（低学年）に有効であった。

平成15年12月に行った全児童のアンケート調査において、算数が好き78%、嫌い21%という結果であった。昨年度より好きな子は４%増加した。その中でも、少人数学習が好きは91%、嫌いは８%という結果であった。好きな理由としては、「よく分かる」や「やる気になる」があげられている。少人数指導に取り組んできた成果と考えられる。

何よりの成果は、これまでよく分からないまま授業を受けてきた子が「分からない」と言えるようになったこと、教師が分からないままでいる子を把握し、なんとかしようとこれまで以上に努力をし始めたことである。

(2)保護者の理解

保護者へのたよりによる啓発、参観会、授業公開での積極的な少人数指導の公開を通して、保護者の少人数指導に対する肯定的な意見が増えてきている。昨年度は62%だった満足度が92%にまで高まっている。また、公開授業におけるアンケート調査でも、96%の保護者が「算数の授業がよかった」と答えている。

(3)県国算定着度調査結果の向上

県定着度調査結果が向上した。特に、算数での表現処理の正答率が、どの学年でも90%前後に達した。少人数指導やドリル学習の成果の一端であると思われる。

(4)学年研修の充実

２Ｃ３Ｔで授業を行うことが多いので、学年で共通理解を図り、授業を進めていく必要があり、より深い教材研究ができた。また、いろいろなクラスの児童と接し、情報交換をすることにより、多面的な評価が可能となった。

(5)自己評価カード記入の定着

児童は、毎時間の自己評価を授業時間内で抵抗なく記入できるようになった。また、教師はその日の授業を反省したり、一人一人の児童の実態を知ったりする事ができた。さらに、保護者にも学習の様子の一端を知らせることができ、意見交換をする手立てとなった。

2　今後の課題

(1)単元構想の工夫（学習集団を変える際の課題）

学習集団が短い時間で変わると担当教師も児童同士も落ち着いて学習に取り組めなかった。単元を見通し、ある程度継続した集団で効果が上がる取り組みが必要である。年間を見通した少人数指導の年間計画の作成が必要である。

(2)発展的、補充的な学習教材の開発

習熟度別学習では、練習問題の量や質を変えて取り組んできたが、さらに、学習方法などのちがいから発展的、補充的な学習教材を開発していきたい。また、数学的な考え方が向上するような授業づくりを目指したい。

(3)評価規準の明確化

評価規準は文章化しているが、関心意欲態度や数学的な考え方の観点では、十分満足、おおむね満足、努力を要する子の判断が難しい。また、教師間の共通理解が必要である。さらに、習熟度別の学習での評価規準の扱いについての検討が必要である。

(4)指導と評価の一体化を目指した取り組み

・自己評価カードの活用　・教師用一覧表の工夫

(5)打合せ時間の確保

・学年打合せ（教材研究）・研修推進委員会・研究部会

少人数指導を行うためには、これまで以上に学年での共通理解を図ることが必要になる。しかし、打ち合わせ時間が取れず、進度をそろえるために同じ指導案で授業を進め、教師の個性が生かし切れていない。

(6)学習環境の充実
・少人数指導を行うための教室の確保　・校内掲示等の充実

(7)ドリル学習の充実
・日課の工夫　・漢字,計算検定の充実

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組
１　意識調査（学校評価）の実施
・対象（全児童・保護者・教職員）

２　国算学力定着度調査の実施（1月上旬）

３　算数各単元における各種テストの実施
・レディネステスト・振り返りテスト・単元末テスト

４　漢字・計算検定の実施（毎月）
（漢字・計算各８枚実施）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及
１　授業公開（研究報告会）
・平成15年10月9日(木)　午後
公開授業（全学級）
全体会　（研究の概要）
講演会　（講師　筑波大学助教授　　清水静海先生
演題　「確かな学力を育てる学校と家庭の連携」）

・平成16年10月７日（木）　午後　（実施予定・内容は検討中）

２　ホームページ開設により研究内容を紹介
・平成15年9月開設
URL　http:/www1.ocn.ne.jp/~okasakie/

３　保護者や地域への説明
・保護者や地域の方に「フロンティア便り」を発行
・フリー参観・授業公開・講演の実施

４　学期ごとの実践記録の作成と実践発表の実施

５　研修部報による校内職員への啓発

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　■１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　■ 少人数指導　■ Ｔ．Ｔによる指導
□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　■算数　□ 理科
□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭
□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無